Alibi

1961

by Harry Carmichael

目次

アリバイ　5
訳者あとがき　265
解説　谷口年史　268

主要登場人物

ジョン・パイパー……………………保険調査員
クイン……………………………………新聞記者。パイパーの旧友
パトリシア（パット）・ウォーレン……自称小説家。本名クララ・ワトキン
スタンリー・ワトキン…………………パットの夫
アラン・ヘイル…………………………事務弁護士
ウィニー・タッドフィールド…………パットの家政婦
レグ・オーウェン………………………酒場兼宿屋〈ロイヤル・ジョージ〉の主人
ゴードン・クック………………………開業医
ミセス・ビルケット……………………パットの元大家
ジリアン・チェスタフィールド………パットの友人
クリフォード（クリフ）・ワトキン……スタンリーのおじ
フォックス………………………………クレセット生命保険会社部長
ロック……………………………………犯罪捜査課警部
テッド・ウィーラン……………………巡査

アリバイ

……夜の暗い手先どもが餌食を求めて蠢きだす

シェイクスピア『マクベス』第三幕第二場より

第一章

急勾配ののぼり坂を越えると、道は左にカーブしながら巨大な闇のかたまりと化したバーント・スタッブの森の麓をまわり、ゆるやかに夕闇へと滑りこんでいく。ここ数週間まともに雨が降っていないせいで、道端の木々や生け垣は白くくすみ、ターンパイク・コーナーで暗渠に流れこむ排水溝には落ち葉が散り積もっていた。

起伏する農地の向こう、ひときわ暗い東の空に小さな光の粒が瞬いている。次のカーブを曲がると、聖ミカエル教会の尖塔のシルエットが、闇に溶けつつある夕景に浮かびあがって見えた。

その先の坂道をのぼりきれば、てっぺんから村の一部が見える。ダッシュボードの時計は十一時五分前を示していた……だが、その時計は少し進んでいる。ルースは家にいるだろうか、と彼は考えをめぐらせた。

……留守ならいいが……あるいはすでに眠っているか。そうすれば無理に言葉を交わさなくて済む……。

〝ふたりのあいだに話す価値のある話題があったのは、遠い昔のような気がする……。たぶん子どもがいれば違ったのだろう。とはいえ、妻がそのことで私を責めるのはお門違いというものだ。赤ん坊を失ったのは私の責任ではない……あれ以来、妻は私を寄せつけなくなった〟

単調なエンジン音を響かせて車は走り、開いた窓から生ぬるい夜風が吹きこんでくる。空の低いところでひときわ明るい星が輝いていた。起伏する農地の向こうにウィントリンガム村の明かりがちらほらと見えた。

まもなく彼は家にたどりつき、顔を合わせるなりルースはたずねるだろう。楽しい夜を過ごしたのか、と……いつもそうたずねるように。

楽しかろうとなかろうと、妻にはどうでもいいことだった。もし彼が退屈だったと答えれば、どうして事務弁護士会の集まりなんかに出席するのか、と判で捺したように妻は言う。その後、ふたりに言うべき言葉はひとつも残されていない。

その昔、夫の行動や出会った人々に妻が関心を持っていたこともある。だが、いまは微塵もないし——これからもない。

……老いた妻を責めるのは公平ではないかもしれない。彼女はもうずいぶん長く生きてきた……。自らの母親に盲目的に尽くし、外の世界に背を向けて生きてきた女の行く末なのか。

月日は飛ぶように過ぎていく。子どもを失って一、二年は、妻はよく言っていたものだ。もうひとり産むには年齢(とし)をとりすぎてしまった、と。夫を手の届く範囲に寄せつけないようでは、子どもができる可能性など万にひとつもなかったが……ついでに言えば、四十手前の男はまだ充分に若く、広い意味において女性を必要としていた。

〝……義務とか道義的責任とかで語られる問題じゃない。私はほかの男たちが当然のごとく享受しているものを望んでいるだけだ……私にだって少しくらい人生を楽しむ権利があるはずだ。不動産の譲渡や遺言やつまらない訴訟とはべつの何かを得る権利が。依頼人が夫婦の問題を話し合っているとき、

弁護士の私が何を考えているかを知ったら、彼らはどう思うだろう……〟

　長年にわたって夫を家具同然に扱ってきた妻が、夫に愛人がいると知るや、あたかもショックを受けたかのようにふるまうのは、実に奇妙でまったくもって不可解である。その手の女たちはルース同様、男はひとりの人間として扱うべきものであり、家賃を支払うだけの存在ではないことを理解していない。子どもが成長すると、もはや自分は用済みだと感じる男もいる。ルースの場合は実母が子どもの代わりだった……その母親もいまは墓のなかだ。

　カーブを曲がるたびに闇は深まり、気温も下がっていくようだ。たぶん明日も暑くなるのだろう。そろそろひと雨来てもいい頃合いだ。天気が崩れる前にルースと休暇に出かけたほうがいいかもしれない……七月は例年雨が多いし……。

　パーリーとゴッドストーンを結ぶ幹線道路をはずれたとき、ヘッドライトを点灯した。自宅までもう少し、あと四、五マイルといったところだ。十一時には着くだろう。帰ったところで楽しみなどひとつもないが。

　……たぶん最後のブランデーは断るべきだったのだろう。酒が過ぎると気が滅入るのはいつものことだ……とはいえ、酔っているわけではないし酔いを感じることさえないが。たかだかブランデー三杯とリシュブール一杯を食事のあとに飲んだだけだ。

　おそらく自分が必要としているのはそれだ。もっと早く気がつけばよかった。近いうちに徹底的に飲んで酔っぱらおう。そして自制心の箍（たが）をはずすのだ。みんなやっていることだ――街で夜を明かし、愉快な時間を過ごす連中もいる。コールガールと会う手はずを整えるのだって難しいことじゃない……。

彼の思考はそこで完全に停止した。その手のことが不得手であることは自覚していた。きっと自尊心が高すぎるのだ……あるいは単に勇気が足りないのか。いずれにしろ見知らぬ他人と――一時間いくらで自分を売るような女と――一夜限りの情事に身を投じる気にはなれなかった。
それにしても、どうやって事に至るのだろう？　最初のとっかかりはひどくばつの悪い思いをするにちがいない……。ただベッドに行くというだけでは、彼の疑問に対する答えになっていなかった。
ヘイルは強いてほかのことに意識を向けた。明日はマクファーレン問題をめぐる審議会が開かれる。弁護士としての意見を求められるだろう。昼食前に裁判所から戻ったら……。
二百ヤードほど前方で道は二手に分かれ、左はウィントリンガムへ、右はオックステッドへと至ることを示す標識が立っている。車のヘッドライトが、両手を広げた格好の標識と、Y字路の股の部分に繁茂する野ばらを照らした。
村までは、そこからさらに二マイルある。わずかに明るさを残す空を背に、黒くにじんだ村の輪郭がぼんやりと見えた。唯一の街路灯が村の入り口を煌々と照らし、曲がりくねった道は二十軒ほどの家々のあいだを通ってロング・ホートンへ続いている。
村のはずれに彼がルースとともに生活を営む家が――営むふりをしている家がある。とうの昔に意味を失った儀式を続ける人々のように。
〝……残念だ……愛のある温かな家庭を築けたはずなのに。ふたりが似た者同士でなかったら……切れた絆を結び直す方法を見つけられたら……。どちらかが死ぬまでこんな生活をずるずると続けるのだろうか。妻の身に何か起きたら自分はどう感じるだろう。自由の身となって人生をやり直せるとしたら何をするだろう……〟

白っぽいものが標識の近くに見えた――車のヘッドライトがY字路の合流地点をかすめた瞬間、それは動いた。白いドレス、もしくはコートを着た女のようだ。近づくにつれて、女が彼に合図を送っていることがわかった。

このまま走り去るべきだ。とっさにそう直感したことをヘイルはあとになって思いだし、その直感に従わなかったことをおおいに悔やんだ。彼のような立場にある男が、見知らぬ女の手招きに応じて車を停めるなんて愚の骨頂だ……とりわけ深夜に……しかもウィントリンガムから二マイルしか離れていない場所で。ウィントリンガムはやたらと風通しがよくて、根も葉もない噂話があっという間に広まるのだ。

しかしそのときの彼は、そうした事なかれ主義的な態度に腹を立てていた。車を停めて事情を訊き、求めに応じて車に乗せてやったとして、いったいどんな不都合があるというのか。こんな夜更けに、ひとけのない田舎道に女をひとり残して走り去るのは正しいことではない。

ヘイルは速度を落とし、標識の前で車を停めた。すでに彼の目は、しなだれかかる満開の野ばらを背に、草で覆われた土手に座る女の姿をとらえていた。ひんやりとした闇のなか、聞こえるのは車の低いエンジン音だけだった。

彼は女に声をかけた。「何かお困りですか？」

女は苦労して立ちあがると、ぎこちなく一歩踏みだして標識につかまった。「助けてもらえないかしら。実は足をひねってしまって……歩くことができないの。迷惑でなければ……」

「もちろん、構いませんよ」ヘイルは運転席のドアを開けて、すばやく車から降りた。「どちらにお住まいですか？」

「このすぐ先の――ホルムウッド・コテージよ。ここから三、四百ヤード行ったところにある……」女は身体をひねってオックステッドへ至るひとけのない道を指さし、その拍子によろめいた。間一髪のところで、彼は女を抱きとめた。「私につかまって。痛めた足首に体重をかけないように。それで、力を合わせてきみを車に乗せるとしよう」

彼女は唇を嚙んで足首をさすった。片方しか靴を履いていなかった。

片腕を彼の肩にまわし、背筋を伸ばすと、苦い笑み浮かべて言った。「馬鹿なことをしたわ。バスを降りたあと、道端の小石を踏んでしまったのね。靴のかかとが折れて、危うく足首まで折るところだった。あなたが通りかからなかったら途方に暮れていたところよ」

靴はハンドバッグと一緒に土手の上に置いてあった。華奢な白いハイヒールは、田舎道を歩くために作られたものではない。かかとが折れて、爪先にひっかき傷がついている。それでもなお、魅力的な脚にふさわしい魅力的な靴であることに変わりなかった。

〝……ルースも昔はよくこんな靴を履いていたものだ。ルースよりこの娘の脚のほうが魅力的だが……スタイルもいい。段違いに。しかも若い――かなり若い。たぶん二十代半ばだろう……〟

昔から憧れていたタイプの女だった。彼の身近にいる女はたいてい妻に似ていた――金髪で、精彩がない女たち。見た目はどれも似たり寄ったりで、温もりや情熱といったものをまるで感じさせなかった。

目の前にいる女は、彼がかつて出会ったどの女とも似ていなかった。幅の広い二重(ふたえ)が印象的な目もと、高い頰骨、ルースなら肉感的と言い表しそうな唇。黒い髪はつややかで、肌は内側から発光しているみたいに輝いて見える。

ウィントリンガムのような片田舎で彼女と出くわすのは、アスターの花畑で蘭の花を見つけるのと同じくらい稀有なことだ。彼女はいったい何者で、いつからここに住んでいるのか。どうしてこんな夜更けにひとりきりでバスで帰宅したのだろう。

彼に支えられて車の前を通るとき、彼女が言った。「あなた、ヘイルさんよね――アラン・ヘイル、事務弁護士の？」

「そのとおりだが、どうして私のことを？」

「あら、このあたりの人のことなら全員知っているわ……とくに村はずれの高級住宅地に住む上流階級の人たちのことは」ちらりと顔を上げていたずらっぽく微笑んだ。「ウィントリンガムのビバリーヒルズってあたしは呼んでいるのよ」

微笑んだ彼女はさらに魅力的だった。ヘイルはふと不安になった。若い女の身体に腕をまわしている彼を見て、村人はどう思うだろう。

誰かが告げ口しても、ルースは絶対に信じないはずだ。それどころか、とんでもなく的はずれな答えを返すだろう。〝……あたしと夫は結婚して十二年も経つのよ、かなう相手などいるはずないわ……〟

ヘイルは片手で助手席のドアを開けると、彼女が足を引きずりながら身体の向きを変えてシートに背中を預けるまで、両手で抱きかかえるようにして支えていた。彼女は薄手のコートの下に首のラインを際立たせるドレスを着ていた。くびれたウエストが高く張りだしたふくよかな乳房を強調していた。

この手の女を間近で見るのはほんとうに久しぶりだった。ルースもかつては魅力的だった。この娘

が使っているようなリンス剤で髪をつややかに保っていたこともある。だが、ルースはいまも昔も男を惑わすタイプではない。用心しないと道を踏みはずす恐れがあることを、ヘイルは自覚していた。
「頭をぶつけないように気をつけて」
何度も口にしたことのあるありきたりな忠告だが、いまはまるっきり事情が違う。これはありきたりな状況ではない。通りすがりの誰かに見られたら、格好の噂話の種になるだろう。
〝……おたがいの身体に腕をまわして抱き合っていたんだ、こんなふうに。ちょうど車を降りたところで、彼女がおやすみのキスをしようとしているみたいだった。なんであんな場所で降ろしたのか。コテージは目と鼻の先にあるのに。彼はもっと分別を持つべきだね、人目につく公道で堂々とあんなことをするなんて。浮気したいなら、少なくともばれないようにこっそりやらないと。しかも彼は弁護士だからね。人は見かけによらないものだ……〟
シートに腰をおろそうと彼女が身をかがめた拍子に、髪がヘイルの頰を優しくなでた。上目遣いにちらりと彼を見あげて言った。「ほんとになんてお礼を言ったらいいか……とりあえず、自己紹介しないといけないわね。あたしはパトリシア・ウォーレンよ」
彼女はすっかり忘れているようだった。彼の肩の上に両手を乗せていることも、彼女を支える手を彼が離そうとしないことも。彼女はやわらかかった――やわらかくて従順だった。中腰のまま彼女を見つめる彼の胸の内に芽生えたものを、女なら見逃すはずはない。
ヘッドライトの向こうに無限に広がる闇と静寂が――ひとけのない完全なるふたりきりの世界が、昼間なら陳腐に思えそうなことに特別な意味を与えていた。
彼女の声は言葉以上のものを伝えていたし、彼女の指は彼から離れることを拒んでいた。丘の向こ

うで聖ミカエル教会が正時の鐘を打ちはじめた。ヘイルはたずねた。「どうして私が誰かわかったんだい？」

ヘイルはそんな自分を頭の隅で戒めていた。おまえのふるまいは控えめに言っても見苦しいぞ。自分のような立場にある人間がとるべき行動ではない。彼女が何者なのか知りもせず……既婚者の可能性もあるのに。

彼女の夫がいまのふたりを——穏当な表現を用いても信用を失いかねない状況にあるふたりを見たらどう思う？　もちろん、それはとんでもない誤解だ。事情は一から十まで簡単に説明できる……仮に説明すべきことがあるとしたら。

そもそも、どうして夫がいると考えねばならないんだ？　彼女は指輪をつけていない。彼女が腕につかまっているとき、ヘイルは無意識のうちに指輪の有無を確かめていた。もし結婚しているとしたら、その事実を伏せておきたがっている……それはそれで意味深ではある……もし結婚しているのだとしたら。

パトリシア・ウォーレンが彼の物思いをさえぎった。「ウィントリンガムの郵便局であなたを見かけたとき、まわりの人に訊いたのよ、あの人は誰なのって。みんな親切に教えてくれたわ、あなたに関することをいろいろとね」最後のひと言は含みがあって、まるで個人的な秘密を握っているみたいだった。

彼女がシートに背中を預けるのを手伝ったあと、ヘイルは言った。「なぜ私のことを知ろうとしたんだい？」

「なぜって、この近辺で一番いい男だから——それが理由よ。言われたことあるでしょう？」彼女は

満足げに微笑み、両脚を車のなかへ滑りこませてシートに身を沈めた。
流し目に彼を見て、彼女は言葉を継いだ。「それにね、あなたは知らないでしょうけど、有能な弁護士が求められているのよ——物書きを生業にしている場合はとくに」
彼はコートのすそを丁寧に車内に押しこんでドアを閉め、窓越しにたずねた。「きみは小説家ってことかい？」
「まあ、小説家と言えば聞こえはいいけど……」彼女の瞳にふと影がさした。「ペンネームで書いているの。だから思いだそうとしても無駄よ。いずれにせよ、あたしの書いたものを気に入るとは思えないわ。あなたは知的すぎるもの」
「私のことをよく知れば、ちっとも知的じゃないとわかるよ。時間があるときは軽めの小説を読むことも多いしね」
こんな馬鹿げた会話をいつまで続けるつもりだと、心の声が彼に問いかけていた。若い女を相手に軽口を叩くなんて、十代の若者じゃあるまいし。美しい顔、なまめかしい姿態、彼女にふさわしい香水のほのかな匂い——そして彼は愚かしく浮かれていた。多少なりとも分別のある男なら、彼女を家へ送り届けて車から降ろし、速やかに立ち去るだろう。あとで後悔するにちがいないことを言ったりしたりする前に。
微笑みを絶やすことなく彼女が言った。「大切なことよね、なんであれ共通点があるっていうのは」
彼女に笑われているように感じながら、ヘイルは運転席にまわって車に乗りこんだ。道端の小石を後輪で弾き飛ばしつつバックで方向転換をすると、オックステッドに至る道を走りはじめた。ダッシュボードの薄明かりのなか、彼女がこっちを見ているのがわかった。

〔著者〕
ハリー・カーマイケル
本名レオポルド・ホーレス・オグノール。1908年、カナダ、モントリオール生まれ。英国内でジャーナリストやエンジニアとして働き、51年にハートリー・ハワード名義で“The Last Appointment”を発表し、作家デビュー。二つのペンネームを使い分け、生涯に85作のミステリ長編を書いた。79年死去。

〔訳者〕
水野恵（みずの・めぐみ）
翻訳家。訳書にJ・S・フレッチャー『亡者の金』（論創社）、ロバート・デ・ボード『ヒキガエル君、カウンセリングを受けたまえ。』（CCCメディアハウス）、ロバート・リテル『CIAカンパニー』（共訳・柏艪舎）などがある。

アリバイ
――論創海外ミステリ 204

2018年2月20日　初版第1刷印刷
2018年2月28日　初版第1刷発行

著　者　ハリー・カーマイケル
訳　者　水野恵
装　丁　奥定泰之
発行人　森下紀夫
発行所　論 創 社
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町2-23　北井ビル
電話　03-3264-5254　振替口座　00160-1-155266

印刷・製本　中央精版印刷
組版　フレックスアート

ISBN978-4-8460-1688-3
落丁・乱丁本はお取り替えいたします